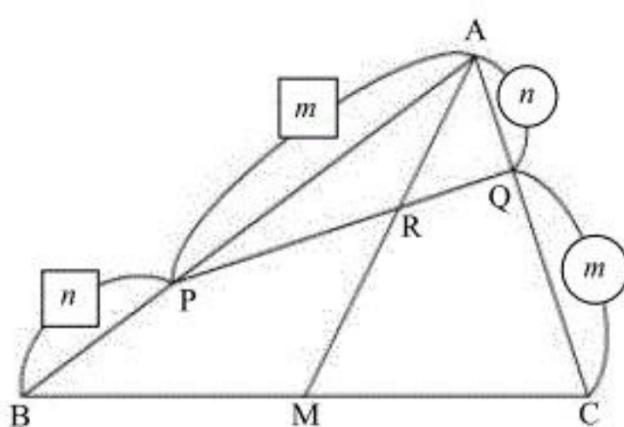


[1]

(1)



Mは線分BCの中点であるので、

$$\begin{aligned}\overline{AM} &= \frac{1}{2}\overline{AB} + \frac{1}{2}\overline{AC} \\ &= \frac{1}{2}\vec{a} + \frac{1}{2}\vec{b}\end{aligned}$$

となる。

(答) $\overline{AM} = \frac{1}{2}\vec{a} + \frac{1}{2}\vec{b}$

(2)

Pは辺ABを $m:n$ に内分するので、

$$\overline{AP} = \frac{m}{m+n}\vec{a}$$

と表せる。同様に、Qは辺ACを $n:m$ に内分するので

$$\overline{AQ} = \frac{n}{m+n}\vec{b}$$

となる。よって、RはPQ上にあるので、実数 k を用いて

$$\begin{aligned}\overline{AR} &= k\overline{AP} + (1-k)\overline{AQ} \\ \therefore \overline{AR} &= \frac{mk}{m+n}\vec{a} + \frac{n(1-k)}{m+n}\vec{b} \quad \dots \textcircled{1}\end{aligned}$$

と表せる。また、RはAM上にあるので、実数 ℓ を用いて

$$\overline{AR} = \ell\overline{AM} = \frac{\ell}{2}\vec{a} + \frac{\ell}{2}\vec{b} \quad \dots \textcircled{2}$$

となる。 \vec{a}, \vec{b} は1次独立であるので、①、②を比較して

$$\begin{cases} \frac{mk}{m+n} = \frac{\ell}{2} \\ \frac{n(1-k)}{m+n} = \frac{\ell}{2} \end{cases} \Leftrightarrow \begin{cases} k = \frac{n}{m+n} \\ \ell = \frac{2mn}{(m+n)^2} \end{cases}$$

であるので、 $\overline{AR} = \ell\overline{AM}$ より

$$\overline{AR} = \frac{mn}{(m+n)^2}\vec{a} + \frac{mn}{(m+n)^2}\vec{b}$$

となる。

(答) $\overline{AR} = \frac{mn}{(m+n)^2}\vec{a} + \frac{mn}{(m+n)^2}\vec{b}$

(3)

$$\begin{aligned}\overline{AR} &= \ell\overline{AM} \\ &= \frac{2mn}{(m+n)^2}\overline{AM}\end{aligned}$$

であるから、 $\frac{AR}{AM} = \frac{2mn}{(m+n)^2}$ である。

$m > 0, n > 0$ であるから、相加平均と相乗平均の関係より、

$$m+n \geq 2\sqrt{mn}$$

が成り立つ。ただし、等号成立条件は $m=n > 0$ である。これより、

$$\frac{2mn}{(m+n)^2} \leq \frac{2mn}{(2\sqrt{mn})^2} = \frac{2mn}{4mn} = \frac{1}{2} \quad \dots \textcircled{1}$$

となる。ここで、三角形の重心は三角形の中線を2:1に内分するので、線分PQが三角形ABCの重心を通るのは

$$\frac{AR}{AM} = \frac{2}{3}$$

のときであるが、①より、 $\frac{AR}{AM} = \frac{2}{3}$ となることはない。ゆえに、線分PQは三角形ABCの重心を通らない。

(答) $\frac{AR}{AM} = \frac{2mn}{(m+n)^2}$
(証明終)

[2]

(1)

第1群より順番に書き出すと

$$1 \mid 2, 3 \mid 4, 5, 6 \mid 7, 8, 9, 10 \mid 11, 12, 13, 14, 15 \mid 16, 17, 18, 19, 20, 21 \mid \\ 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28 \mid 29, \dots$$

となるので、自然数29は第8群である。

(答) 第8群

(2)

第 n 群に入る最大の自然数は、第 n 群までに含まれる自然数の個数に等しいので

$$1+2+\dots+n = \sum_{k=1}^n k = \frac{1}{2}n(n+1)$$

である。 $n \geq 2$ のとき、第 n 群の最小の自然数は第 $n-1$ 群に入る最大の自然数より1大きいので

$$\frac{1}{2}n(n-1)+1 = \frac{1}{2}n^2 - \frac{1}{2}n+1$$

となる。 $n=1$ のとき、 $\frac{1}{2}n^2 - \frac{1}{2}n+1=1$ となるので、これは $n \geq 1$ で成り立つ。

(答) 最小： $\frac{1}{2}n^2 - \frac{1}{2}n+1$

最大： $\frac{1}{2}n(n+1)$

(3)

2017が第 k 群に存在するとする。このとき、2017は第 $k-1$ 群の最大値よりは大きく、第 k 群の最大値以下であるから、

$$\frac{1}{2}(k-1)k < 2017 \leq \frac{1}{2}k(k+1)$$

$$\Leftrightarrow (k-1)k < 4034 \leq k(k+1)$$

が成立する。ここで、

$$63 \cdot 64 = 4032$$

$$64 \cdot 65 = 4160$$

であるから

$$(64-1) \cdot 64 < 4034 \leq 64 \cdot (64+1)$$

が成立する。よって、 $k=64$ であるので、2017は第64群に入る。

(答) 第64群

[3]

a)

真数条件より、 $y > 0$ である。与式を変形すると

$$\log_2 y - 2x + 3 = 0$$

$$\Leftrightarrow \log_2 y = 2x - 3$$

$$\therefore y = 2^{2x-3}$$

となる。これは連続関数である。 $2x-3$ は全ての実数値をとり、 $y = 2^{2x-3}$ は単調増加で

$\lim_{x \rightarrow -\infty} 2^x = 0$, $\lim_{x \rightarrow \infty} 2^x = \infty$ であるから、真数条件と合わせて、 y のとりうる値の範囲は $0 < y$ と

なる。

$$\text{(答)} \quad y = 2^{2x-3}, y > 0$$

b)

真数条件より、 $y > 0$, $x^2 + 1 > 0$ である。与式を変形すると

$$\log_2 y + \log_2 (x^2 + 1) - 3 = 0$$

$$\Leftrightarrow \log_2 y = 3 - \log_2 (x^2 + 1)$$

$$\Leftrightarrow \log_2 y = \log_2 \frac{8}{x^2 + 1}$$

$$\therefore y = \frac{8}{x^2 + 1}$$

となる。これは連続関数である。 $1 \leq x^2 + 1$ より $0 < \frac{1}{x^2 + 1} \leq 1 \Leftrightarrow 0 < \frac{8}{x^2 + 1} \leq 8$ となるから、真

数条件と合わせて、 y のとりうる値の範囲は $0 < y \leq 8$ となる。

$$\text{(答)} \quad y = \frac{8}{x^2 + 1}, 0 < y \leq 8$$

c)

真数条件より、 $y > 0$, $x^2 + 1 > 0$ である。与式を変形すると

$$\log_2 y - \log_4 (x^2 + 1) - 1 = 0$$

$$\Leftrightarrow \log_2 y = 1 + \log_4 (x^2 + 1)$$

$$\Leftrightarrow \log_2 y = 1 + \frac{\log_2 (x^2 + 1)}{\log_2 4}$$

$$\Leftrightarrow \log_2 y = 1 + \frac{1}{2} \log_2 (x^2 + 1)$$

$$\Leftrightarrow \log_2 y = \log_2 2\sqrt{x^2 + 1}$$

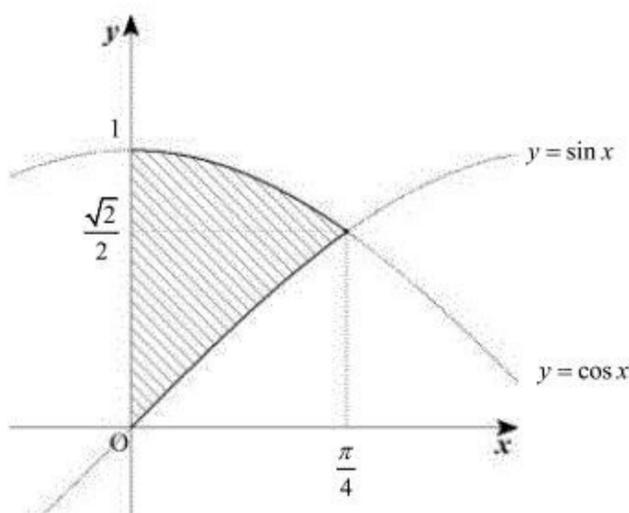
$$\therefore y = 2\sqrt{x^2 + 1}$$

となる。これは連続関数である。 $1 \leq x^2 + 1$ より $1 \leq \sqrt{x^2 + 1} \Leftrightarrow 2 \leq 2\sqrt{x^2 + 1}$ であるから、真数条件と合わせて、 y のとりうる値の範囲は $2 \leq y$ となる。

$$\text{(答)} \quad y = 2\sqrt{x^2 + 1}, y \geq 2$$

[4]

(1)



図形 D は上図の斜線部分であり、その面積は、

$$\begin{aligned} \int_0^{\frac{\pi}{4}} (\cos x - \sin x) dx &= [\sin x + \cos x]_0^{\frac{\pi}{4}} \\ &= \left(\frac{\sqrt{2}}{2} + \frac{\sqrt{2}}{2} \right) - (0 + 1) \\ &= \sqrt{2} - 1 \end{aligned}$$

となる。

(答) $\sqrt{2} - 1$

(2)

それぞれ部分積分を用いて、

$$\begin{aligned} \int x \sin x dx &= \int x (-\cos x)' dx \\ &= -x \cos x + \int \cos x dx \\ &= -x \cos x + \sin x + C_1 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \int x \cos x dx &= \int x (\sin x)' dx \\ &= x \sin x - \int \sin x dx \\ &= x \sin x + \cos x + C_2 \end{aligned}$$

となる。ただし C_1, C_2 は積分定数とする。

(答) $\int x \sin x dx = -x \cos x + \sin x + C_1$

$\int x \cos x dx = x \sin x + \cos x + C_2$

(3)

部分積分法と(2)の結果を用いて、

$$\begin{aligned} \int x^2 \sin x dx &= \int x^2 (-\cos x)' dx \\ &= -x^2 \cos x + \int 2x \cos x dx \\ &= -x^2 \cos x + 2x \sin x + 2 \cos x + C_3 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \int x^2 \cos x dx &= \int x^2 (\sin x)' dx \\ &= x^2 \sin x - \int 2x \sin x dx \\ &= x^2 \sin x + 2x \cos x - 2 \sin x + C_4 \end{aligned}$$

となる。ただし C_3, C_4 は積分定数とする。

(答) $\int x^2 \sin x dx = -x^2 \cos x + 2x \sin x + 2 \cos x + C_3$

$\int x^2 \cos x dx = x^2 \sin x + 2x \cos x - 2 \sin x + C_4$

(4)

曲線 C_1, C_2 の方程式をそれぞれ、

$$y_1 = \sin x_1 \quad (0 \leq x_1 \leq \frac{\pi}{4})$$

$$y_2 = \cos x_2 \quad (0 \leq x_2 \leq \frac{\pi}{4})$$

とすると、求める立体の体積 V は、

$$V = \pi \int_0^{\frac{\sqrt{2}}{2}} x_1^2 dy_1 + \pi \int_{\frac{\sqrt{2}}{2}}^1 x_2^2 dy_2$$

となる。 $\pi \int_0^{\frac{\sqrt{2}}{2}} x_1^2 dy_1$ について、 $y_1 = \sin x_1$ であるから、

$$\frac{dy_1}{dx_1} = \cos x_1$$

であり、 y_1 と x_1 は次のように対応する。

y_1	0	→	$\frac{\sqrt{2}}{2}$
x_1	0	→	$\frac{\pi}{4}$

以上より、

$$\begin{aligned} \pi \int_0^{\frac{\sqrt{2}}{2}} x_1^2 dy_1 &= \pi \int_0^{\frac{\pi}{4}} x_1^2 \frac{dy_1}{dx_1} dx_1 \\ &= \pi \int_0^{\frac{\pi}{4}} x^2 \cos x dx \\ &= \pi \left[x^2 \sin x + 2x \cos x - 2 \sin x \right]_0^{\frac{\pi}{4}} \\ &= \frac{\sqrt{2}}{32} \pi^3 + \frac{\sqrt{2}}{4} \pi^2 - \sqrt{2} \pi \end{aligned}$$

となる。同様に、 $\pi \int_{\frac{\sqrt{2}}{2}}^1 x_2^2 dy_2$ について、 $y_2 = \cos x_2$ であるから、

$$\frac{dy_2}{dx_2} = -\sin x_2$$

であり、 y_2 と x_2 は次のように対応する。

y_2	$\frac{\sqrt{2}}{2}$	→	1
x_2	$\frac{\pi}{4}$	→	0

以上より、

$$\begin{aligned} \pi \int_{\frac{\sqrt{2}}{2}}^1 x_2^2 dy_2 &= \pi \int_{\frac{\pi}{4}}^0 x_2^2 \frac{dy_2}{dx_2} dx_2 \\ &= \pi \int_{\frac{\pi}{4}}^0 (-x^2 \sin x) dx \\ &= \pi \int_0^{\frac{\pi}{4}} x^2 \sin x dx \\ &= \pi \left[-x^2 \cos x + 2x \sin x + 2 \cos x \right]_0^{\frac{\pi}{4}} \\ &= -\frac{\sqrt{2}}{32} \pi^3 + \frac{\sqrt{2}}{4} \pi^2 + \sqrt{2} \pi - 2\pi \end{aligned}$$

となる。よって、

$$\begin{aligned} V &= \pi \int_0^{\frac{\sqrt{2}}{2}} x^2 dy + \pi \int_{\frac{\sqrt{2}}{2}}^1 x^2 dy \\ &= \left(\frac{\sqrt{2}}{32} \pi^3 + \frac{\sqrt{2}}{4} \pi^2 - \sqrt{2} \pi \right) + \left(-\frac{\sqrt{2}}{32} \pi^3 + \frac{\sqrt{2}}{4} \pi^2 + \sqrt{2} \pi - 2\pi \right) \\ &= \frac{\sqrt{2}}{2} \pi^2 - 2\pi \end{aligned}$$

と求められる。

(答) $\frac{\sqrt{2}}{2} \pi^2 - 2\pi$